

第23回国際セーフコミュニティ学会

稲坂 恵

The 23rd International Safe Communities Conference, Novi Sad, Serbia

Megumi Inasaka

第23回国際セーフコミュニティ学会が2017年10月10日(火)～12日(木)の3日間セルビアの第2の都市ノビサドで行われた。筆者は口述発表のため参加したのでその様子を報告する。

今回の学会テーマは『Safe communities are an Essential Need for a Modern-Day Society』で、「傷害と暴力は世界的な公衆衛生上の重要課題であり、その解決のための新たな考え方や経験を探し継続的に世界を安全な場にしていく。そのために傷害予防の専門家やセーフティプロモーションの実践家、研究者、開業医、政策担当者、セーフコミュニティの推進団体に議論討議し情報と経験を共有する」としている。会場はホテルであった。

そもそもこの学会は1989年にスウェーデンのストックホルムで開催された第1回事務・傷害予防世界会議で、セーフコミュニティのマニフェストとして「何人も等しく健康と安全の権利を有する」という人権宣言が基本となっている。世界保健機関の地域に根差した協働センターが7指針に基づくセーフティプロモーション活動を推奨して世界に普及し、認証セーフコミュニティが世界に広まる中、地域学会が始まり、数年前から国際学会と地域学会が隔年となった。ちなみに来年のアジア地域学会は厚木市で11月開催予定である。

本学会の演題は35ヵ国からであり参加者数の発表はないが200人位と思われた。日本人の参加者はセーフコミュニティ推進機構が率いる自治体グループと明治大学安全学の教授が率いる学生たち、その他、総勢20人ほどであった。公用語は英語、セルビア語、ロシア語であり、発表者数は多い順にイラン49人、セルビア32人、ロシア20人、日本と韓国が共に10人であった。ただ学会への事前問い合わせが困難であったり、返事が不適當だったり開催前から運営の不備があり、プログラム詳細もHP上での事前掲載はなかった。会場入りして登録直前に会ったセーフコミュニティ機構の白石氏より日本人リストに私の名前が無いと言われたが、スムーズに登録できた。ところが頂いたプログラム集に自分の演題がないことに気付き大いに落胆する事態となってしまった。しかし横浜市栄区のセーフコココミュニティ認証時の審査員であった中国シュウメイ氏も同じく口述発表演題の掲載がなかったと聞いた。そのシュウメイ氏と演者・座長として演題集に名前があるリトアニア友人からは、それぞれ“発表する緊張から解放されたのだから楽しもう！”

との発言があり、私も当初の不満を吹き飛ばし悪あがきせず、彼らの言葉に従うことにした。なお、発表できた演題申請者は開催10日程前にプログラムをダウンロードするようにとメール配信があったそうである。

今回の学会にはセーフティプロモーションの創設者であるLeif Svanström教授が久しぶりに参加していて嬉しい再会を果たした。教授から開催前日のウエルカムパーティに着物姿で現れると思っていたのに何故来なかったのかと問われたが、招待者だけだったので私は番外と伝えた。かつてカロリンスカ研究所で教授の講義を受けた際、なぜ日本では浴槽で溺れが発生するのかという質問に当時はきちんと答えられなかったが、今回それをまとめた発表内容であったことから、自分用に用意したスライド原稿を教授に渡すことができ、長年の宿題を提出した結果になった。

学会初日は10時よりオープニングセレモニーが始まり、子どもたちとパラリンピック参加者が中央から入り、国歌斉唱、小中学生の歌と踊り、トランペット演奏による幼児たちの“幸せなら手を叩こう”で歓迎してもらった。そして学会長の挨拶、セルビアのプリンセスKatherineの祝辞に続き、Svanström教授からの挨拶でこれから託す人材としてオーストラリアのHanson氏とスウェーデンのMohammadi氏の名が揚げられた。

そして1時間遅れで全体会が同じ場所で始まった。今回の重要かつ核となる講演者6人が壇上に並び、順番に20分ずつ発表していく形式であった。同じ円卓の自治体グループと関係日本人は白石氏の同時通訳を聴いていたが、私は拙い英語頭へと切り替え聴くことにした。最初

写真1. オープニングセレモニー
(プリンセスKatherineの祝辞)



写真2. プリンセスKatherine



はSvanström教授でセーフコミュニティとは何かという基本的な話から始まった。スウェーデンで1970年代からコンセプトが作られ、世界保健機関傘下の協働センターとして1989年に作成したマニフェストを再確認し、現在はNGOとして継続していることが紹介された。そして今回の学会テーマの現代社会でもSafe for allを確認していた。

オーストラリアのHanson氏はセーフコミュニティMackayのケース研究について壇上を降りフロアの参加者に机を叩きながら熱く語っていた。Mackayは傷害率が高いことから2000年に活動が開始され2004年に81番目のセーフコミュニティとなっている。ソーシャルネットワーク分析を実施し、ネットワークの倍増と4年間で基幹病院の救急部門傷害数が12%減少したと報告した上で、この活動を統合してネットワークを強め、トップダウンとボトムアップを調整し、合意形成にて協働していく活動をもっと世界に広めようと強調していた。スウェーデンのDalal氏は傷害による損失額を示し、セーフコミュニティは傷害予防とセーフティプロモーションで持続可能な福祉の発展に焦点を当てたパートナーシップの中で対話的アプローチに頼るべきだと語っていた。更にコミュニティ開発としてガバナンスとコラボレーションの方針と実践を強調し、有病率より費用効果が高いこと、単純な疫学研究より政策ツールがより成功すると結論づけていた。6番目は日本の白石氏で日本各地のセーフコミュニティ都市を表にして各成果を発表し、特に厚木市の市民満足度が32.8%から52.7%へ高まったと紹介していた。午後からの全体会も同じ場所で行われたが壇上6人が並んだ後に慌ただしく演者一人加わって7人となった。最初の演者はアメリカのRyan氏でSafe Kids Worldwideを代表して人権と故意ではない傷害の分析を発表していた。その後の発表3名はスライドが全く無く、またロシア語・セルビア語での発表を同時英訳で聞くという状況であったことから、私の聴く意欲は薄らいでしまった。しかし追加演題ではプログラムに掲載されていないイタリアからの発表であり演者名は記録できなかったが、タイトルは「小児の窒息傷害を如何に防ぐか？」であり、興味を持った。まず食品での窒息が77%と報告し、予防活動であるURL: www.safefood4children.orgを紹介した後、YouTube (疫学・

子どもの解剖・発生メカニズム・子どもの行動など) を皆で観覧した。このビデオは日本語を含む多言語ならびに手話で語られており、日本でも紹介したい内容であった。次の別部屋で行われる予定の3分科会はスケジュール遅れの影響で明日に持ちこまれることになった。ポスターは分科会部屋へ繋がる空間で終日掲示されていた。

2日目・3日目のプログラムは午前中に全体会(1時間半)2セット、午後に2分科会とセルビア人向けのパネルセッション、誰でも参加できるワークショップであり、ポスターは毎日張り替えられていた。2日目の全体会で秩父市長がセーフココミュニティ活動の報告をし、具体的成果として交通事故、犯罪認知件数、山岳遭難件数、自殺者数の減少を揚げていた。

写真3. 秩父市長の口述発表の様子
(秩父市HPの掲載写真から許可を得て掲載)



全体会ではSvanström教授がコメントする場面が多く、7指標の確認や地方リーダーの重要性、今回のテーマである現代社会に対応すべき次のステップへのバージョンアップも指南していた。ヘルシーシティの発表では、セーフティプロモーションはヘルスプロモーションから出発したものではないと道筋を正す場面もあった。アジアの韓国・台湾・タイの発表では傷害サーベイランスの仕組みを活用しており、未だに仕組みが不十分な日本をどうしたものかと考えてしまった。なお分科会では演者不在が多く、最も酷かったのは9演題中1人だけという分科会であった。この分科会の講演者はノルウェーのSomerkoski氏で、子どもの傷害は45%が小学校で発生していることから、言語ではなくアニメや視覚的なツール(赤=傷害、黄色=ニアミス、緑=安全)で傷害予防教育をし、教師がレポートを提出する仕組みを紹介していた。続いて別のテーマでの発表も披露し、安全文化・安全学習・安全環境について考え学んで行動していく安全教育を教師に指導し、その教師が生徒たちに指導しているという内容であった。この分科会への参加者はセルビア2人、中国2人、タイ1人、日本1人の計6人であり、残り時間は演者・司会者と一緒に情報交換しながらのディスカッションとなった。予測不可能な子ども

の行動・いじめ問題・凶暴化している学生対策・受動喫煙被害など多岐に渡る内容を語り合うことが出来た。体育教師や芸術教師はリスクを学んでいるし、特に小児科医は子どものリスクを熟知しているので情報提供していくべきとのまとめとなった。タイの参加者はセーフティプロモーションを自国に根付かせたAdisak氏の弟子の小児科医である。

最終日のクロージングセレモニーではまずSvanström教授から世界各国の功労者の名前が読み上げられて各自壇上に上がり、日本では白石氏に功労賞が授与された。またSvanström教授よりNGO代表の座をDale Hanson氏に引き継ぎ、副代表はReza Mohammadi氏との声明があった。そしてコンセプトに基づき、世界保健機関からの同意を得て、多数ある文献をレビューしながら、コミュニティのために政治家を含む支援者を増やし、セーフティプロモーションを推進発展させていこうと呼びかけていた。新しい代表のHanson氏は傷害による死亡は6秒に一人発生しているから huge taskであり、議論しながら世界を変えていこうと力強く語っていた。最後に次回国際学会開催国のマケドニアがスライドで内容の紹介をしていた。また次期アジア大会の厚木市は市長のビデオメッセージを流し2018年11月12日～15日開催への参加を呼び掛けていた。

写真4. クロージングセレモニー (功労賞の方々)



写真5. NGOのロゴ (<http://isccc.global/>)



写真6. The Founder Professor Leif Svanström welcomes the new Chairman Dale Hanson



今回の学会は公用語が英語に加えセルビア語とロシア語が加わった関係なのか演題内容の偏りを痛感した。ロシアは精神科領域が多く、セルビアは前十字靱帯損傷や骨折など整形外科領域も多く、虐待(暴力)や自殺関連の演題はとても少なかった。新しい傾向としては、精神発達遅滞者や多動症者の安全、新生児の栄養、車運転手の走行中の携帯使用問題などの演題があった。印象としては、安全といってもセーフティプロモーションのコンセプトがない発表も多く、特にセーフコミュニティの父(自称祖父)と慕われているSvanström教授を知らない若者が多かったことには驚くばかりで、とても残念であった。

Gala dinerは最終日の20:30から行われ、Svanström教授の感無量さが側にいて感じ取れた。賑やかな会場では壇上の生演奏に参加者が集まって合唱する姿は壮観であり、参加者の仲間意識が高まっていった。また往年の方々がフロアで社交ダンスを始めた姿にはその美しさに目を奪われた。日本人の円卓ではなくリトアニア友人と別の円卓に座ったことで、思いがけず初めての方々と語り合い、日本を見つめ直す機会となった。食事の配膳に時間がかかったこともあり、隣席の親日家であるモーリシャス紳士からいろいろ質問を受けた。最初の質問はお嬢さんが日本に関心をもっており、いずれ留学予定なのでフクシマは大丈夫かというものであった。3.11では津波による原子炉爆発で日本政府は混乱し、今でも全様は隠されていて、むしろ海外情報の方が正しいと話すに至ったが、どこの国も同じだと慰められた。実は昨年訪ねたウィーン自然博物館で、3.11後の風の流れが秒毎に世界地図上に表示されており、日本人が知らないところでしっかりフクシマが伝えられているのだ。日本は現在一時停止した原子炉が再稼働している事実も伝えざるを得なかったが、最終的には日本の良いところや日本の安全の話でお開きとなった。

写真7. ガーラディナー



今回の学会では杜撰な会場運営に振り回された。初日17時からのツーリストツアーでは担当者が旧市街まで同行したが、歴史大好きガイドにバトンタッチした後に姿を消してしまった。ガイドの興味深い説明で教会やセーヌ川対岸の要塞などを徒歩で回った後、その担当者が姿を現したが旧市街まで一緒に戻っただけで、ホテルの方

向とタクシーを拾える場所を教えて立ち去ってしまった。参加者はタクシー組と徒歩組に分かれたが、取り残された形の徒歩組は私とノルウェー紳士のふたりであり、暗い道を20分余歩いてホテルに戻ったので、3時間半の徒歩ツアーであった。更に学会終了翌朝にノビサドからベオグラードのホテルまでの送りを予約していたが、運転手がベオグラード市内に不慣れであり、ホテルはこの近くだと道端で降ろされてしまった。結果的に目的のホテルは無く、新たにタクシーを調達して目的ホテルに到着できたという顛末であった。

結論として学会の印象は良くは無かったが、Svanström教授はじめ同志に会えた喜びは大きく満足であった。Svanström教授は組織をNGOにしなければならなかった事態を嘆いており、特に自国での仕打ちに対し怒り心頭のようなようであった。今後は新しい代表・副代表ならびにセーフティプロモーションをコンセプトから理解しているSvanström教授の愛弟子たちがリードしていかねばならない。やるべきことはまだまだある。だから微力であっても前進あるのみと新たな誓いを立てた学会になった。